

FAITH

渡辺 政直

元日本聖公会首座司教。1986年に退職後、「再度、現場の第一歩に戻り、人々への奉仕活動の道を歩みたい」という希望のもと、1987年7月、夫人とともにタンザニアのダルエスサラームに渡る。当地において、貧しい人々や、同港にある「THE MISSION TO SEAMEN」という船員のための休養施設で奉仕活動を行う傍ら、タンザニア各地の英国教会（THE ANGLICAN CHURCH）でも奉仕活動が続けている。夫人は看護婦の資格を生かし、医療奉仕活動をしている。



アフリカ便り

ムジンガ

日本は南北に延びる国で、四季が比較的はっきりしている。厳しい冬が明け春到来ともなると、樹木や草が一斉に芽を出し美しい花をつける。タンザニアは熱帯性気候の中にあるので、四季は明確でなく雨季と乾季のくりかえしである。4月から9月半ばにかけては、インド洋より吹き寄せる南西風のモンスーンの影響で涼しくなり、夜間や早朝はかなり冷え込む。それに対し10月から翌年3月頃までは、汗が吹き出るような暑さになる。

でも、一年中花の見られぬ季節などない。プーゲンビリアやハイビスカス等、涼しい季節にも結構咲いている。だが、草も樹木も暑さの強くなる9月頃になると勢いつき、花の数がずっと増えて重みで枝が垂れる程になる。アカシヤの樹は真黄色なブドウ状の花を満開にし、火炎樹は11月から12月にかけて樹木全体が真っ赤な花で覆われる。人々は「クリスマスツリー」と呼んでいる。

日本では見られない美しい花が沢山ある。時々、「この花はなんという名前ですか」と尋ねると、帰ってくる答えは「マウア」だ。「花」というわけだ。特別に名前はないが、「花」なのだ。色々な人と話をしてみても判ったことだが、タンザニアの人にとって花が美しいからといって名前をつけるまでには値打ちがない、ということらしい。それより、彼らの実生活に潤いを与えてくれる果実を生み出す樹木には、きちんと名前をつける。プーゲンビリアもハイビスカスもアカシヤも美味しい実を結ぶ樹木ではないから、彼らから見れば名前は必要なく、外来語でいこうに構

わないことになる。

私どもの住まいの真向かいに直径60センチの大木が見える。枝ぶりが素晴らしく、大きな日陰を作ってくれるので、樹下に入ると涼しい。この樹は真っ白な花を何百とつける。濃緑色の葉から浮き出るようだ。不思議なことに、365日、一日も満開でない日はない。樹全体が純白の花を、これでもか、これでもかと押し上げるようにして、満艦飾に咲いている。教会の礼拝にこの花を飾ると、とても清楚で美しい。でも長持ちせず、たった一日で花が落ちてしまう。枝を折ると乳液がしたり落ちる。後で分かったことだが、花瓶の水を吸い上げる花ではないようだ。果実は、また、葉と見分けがつかない位貧弱な、サヤエンドウに似た恰好だ。実は、何人もの人にこの樹木の名前を尋ねてみた。知らないという人、「マウア」という人が多かった。そのうちに、「この樹は『ムジンガ』と言います。」と教えてくれる人がいた。何とその意味は『お馬鹿さん』であった。毎日樹木全体を白い花で一杯にしても、美味しい果実をちっともくれないので、『お馬鹿さん』ということなのか。

それ以来、このムジンガが大好きになった。毎朝、玄関を開けると精一杯に花をつけているムジンガが目に見え込んで来る。日中の仕事を終えて家に帰ってくると、正装した騎士の居並ぶ中に迎えられるような気持ちになる。また夜、星空の下でダイヤモンドが輝くように白く光って見える。ただの一度も満開の装いを辞めない樹。疲れを見せぬ樹。最上の美を無言の中に表して、周囲を幸せにしてくれる樹に、ただただ脱帽している。